**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６１回　（２０２０年３月１０日）**

**・第６１回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３６頁**

（２月の復習）

参加者：前回は、他で学んだ経験がある人よりも、初めて学ぶ人のほうが信仰が深まる、という話がありました。

マハーラージ：他で学ぶことで、少し知識を得た人は、間違えた理解をしていることがよくあります。それにも関わらず、「私は知っている」と言うエゴがあります。

我々は、具合が悪くなるとドクター・グーグルで調べるとある程度のことは分かるのに、先生に診てもらうために病院へ行きますね。しかし、宗教に関してだけは、誰からも教わらなくても自分で本を買って勉強をしたらそれで十分だ、と考える人がたくさんいます。泥棒すら師匠から盗み方を学ばなければ完璧に盗むことはできない。すべてのことは、完璧にするためには、グルが必要なのです。

霊的になりたい人が、グル（先生、導き者）が必要ないと考えると、その人は進むことはできません。それだけでなく、だれにも頼らず本で勉強をしただけで「自分は霊的なレベルが結構高い」と誤解することは、自分を欺くことでもあります。それも問題です。

参加者：学ぶには、謙虚な態度が大事です、という話もありました。

マハーラージ：

「私は真理について知りたいです。もし説明をしてくだされば、私は理解できるので、どうか教えてください」というのが真理を勉強する正しい態度です。スワーミージーはその態度でした。

バガヴァッド・ギーターでアルジュナは、シュリー・クリシュナが言う意味が理解できないときは、何回も「私は分からないので説明してください」とお願いします。けっしてシュリー・クリシュナの言うことが間違っているとは言わない。自分の考えが正しいとも言わない。「私にはわかりません。あなたのいうことに関して混乱がでました。どうぞ説明してください」と、尊敬をもってグルであるシュリー・クリシュナに尋ねます。

また、真理を勉強するとき、真理の話を聞いてわからなくても、質問せずに黙っていることも問題です。特に日本では質問はとても少ないです。

参加者： ①聖典に書かれていることを勉強し（＝シャーストラ・ギャーナ）、

②実践して、

③絶対の真理の知識（＝タットワ・ギャーナ）を得ます。

マハーラージ：このことはとても大事です。どれだけバガヴァッド・ギーター、バーガヴァタム、バイブルなどを勉強して聖典の知識があっても、本当の理解がないと進みません。清らかになりません。聖典などの勉強は、真理を求めるための最初の段階です。幼稚園のようなものです。聖典の勉強の次に、絶対に実践をしなければなりません。そうしないとレベルが上がらない。各個人の実践が必要です。

例えば、グルからイニシエーションを受けてマントラを授かった人が、3年4年とそのマントラを唱えても性格が変わらない。相変わらず怒り、嫉妬、うぬぼれ、などが続くようだったら、それはマントラに問題があるのではなく、実践に問題があります。なぜなら、イニシエーションを受けてマントラを唱えると、絶対に性格は変化しますから。もっと清らかになります。時々どのように心が変化したかを内省したほうがいいですね。イニシエーションで授かったマントラを忘れたり、グルの名前を忘れている人もいます。マントラを覚えていても、はっきりとは覚えていない。気が向いた時だけマントラを唱える。それでは結果は出ません。

もしマントラの力で助かりたい、と思うのなら、一番大事なことは信仰です。

・このマントラは素晴らしい。

・マントラによって自分の生活は変化する。

・マントラによってもっと清らかになる。

・絶対にできる。

このような信仰をもって、毎日毎日実践します。朝と夕だけでなく、できるだけマントラを唱えることです。そうすることで絶対に変化できます。悟ることができます！

みなさん、真理を悟るための障害は何でしょうか？

参加者：悟れないかもしれないと思ってる。

マハーラージ：そうです。「私は今生では悟ることができない、悟るのは、たぶん来生かもっと後だろう」、そう考えることが一番大きな障害なのです。ヴェーダーンタの学者でラーマクリシュナ僧院の有名なお坊さんが、「真理の悟りの一番の障害は『自分は今生では悟ることができない』という考えだ」と言いました。

できると思えばできる！　You can, if you think you can.

あなたが「私は絶対に悟ることができる」と信じ、できる限り実践をすると、絶対に神様の恩寵で悟ることができます。もちろん神様にお任せすることが大事です。「できない」と考えるとできません。

我々に必要なことは、

すべての罪は取り除かれる。

清らかになれる。

絶対タクールの恩寵でシュリー・ラーマクリシュナの悟りはできる。

という、燃えるような信仰です。

シュリー・ラーマクリシュナの在家直弟子のギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは過去にさまざまな過ちを犯しましたが、「ラーマクリシュナの恩寵をいただいているのだから、絶対に私は悟ることができる」という、熱く燃えるような信仰心を持っていました。

参加者：ブラフマンだけが実在。それ以外は非実在です。ということも学びました。

マハーラージ：みなさん、誤解しないでください。ブラフマンだけがあります。もし、ブラフマンが実在で、それ以外が非実在だと考えると、ブラフマン以外に非実在のものがあると言うイメージが出ます。例えば、キリスト教では神様とサタン（悪魔）が存在すると言われています。神様がもし全能で、サタンがまた別の力を持っているとすると、矛盾が出ますね。

ヒンドゥ教では、ブラフマンだけが実在です。マーヤーもブラフマンから出ています。マーヤーの中にはヴィディヤー・マーヤー（知識へ導くマーヤー）とアヴィディヤー・マーヤー（無知へ導くマーヤー）がありますが、どちらもブラフマンから出ています。ヴィディヤー・マーヤーは例えると、影です。影は光がないと出ません。あなたの影はあなたと共に歩きますが、影という存在はありませんね。それと同じように、無知の影響で「マーヤーはある」と考えられていますが、本当はブラフマン以外にはなにもありません。

宇宙はブラフマンの一時的なあらわれです。そしてブラフマンの一時的なあらわれを非実在と言っています。体もブラフマンの一時的なあらわれです。ブラフマンの一時的なあらわれは、あらわれる⇒なくなる⇒あらわれる⇒なくなる、を繰り返します。

波を考えてください。

波は海から出ます。波が見えます。しかし、波はなくなり再び海と一つになります。波がブラフマンの一時的なあらわれで、海がブラフマンです。

ブラフマン以外は何もないです。実在以外何もない。

その考えで、スワーミー・トゥリヤーナンダジは、「ブラフマンだけが正しい」といつも識別をしていました。しかし、亡くなる直前にトゥリヤーナンダジは「ブラフマンも正しい、宇宙も正しい！」と言いました。

その言葉の意味は、「宇宙もブラフマンの一つのあらわれと考えると、宇宙も正しい」ということです。宇宙はブラフマンの一つのあらわれですが、一時的なあらわれです。そこだけがブラフマンとマーヤーの違いです。

では、どうしてマーヤーを一時的だというのでしょうか？

まず、プラクリティについて考えてください。

プラクリティとマーヤーは同じです。プラクリティはある時あらわれます。

マーヤーもあるときブラフマンからあらわれますが、海と波のようにブラフマンと再び一つになります。ブラフマンとマーヤーの関係はそのように考えてください。非実在と言いますが、すべては実在です。一時的なあらわれと永遠のあらわれの違いです。プラクリティは一時的なあらわれです。あらわれます⇒消えます。創造の時あらわれます。そして破壊のとき、ブラフマンと一つになります。破壊のときにプラクリティがなくなるとは言わず、ブラフマンと一つになる、と言います。ブラフマンから出て、再びブラフマンに入るからです。ブラフマンがあって、マーヤーがまた別にある、ということではありません。

二元論的に考えると、大きな混乱になります。

トゥリヤーナンダジが最後に言ったように宇宙も正しいです。

「ブラフマンも真理（サッティヤ）、宇宙も真理（サッティヤ）」

トゥリヤーナンダジが最後にそう言ったのを聞いて、周りの皆さんはびっくりしました。もちろん実践のときは、非実在と実在を識別しなければなりません。識別をしないと進むことが難しいです。

トゥリヤーナンダジが最後に「ブラフマンも真理、宇宙も真理」と理解したのは、トゥリヤーナンダジがヴィッギャーニのステージにあったからです。最終的に、すべては同じものです。

しかし、我々があたりを見回すと、すべてが別々のものに見えますね。ウパニシャッドでは、無知の影響で別々に見えると言っています。例えば、Aさん、Bさん、Cさんが、名前も性格も仕事も違う別々の存在に見えます。どうして一つの存在に見えないか、その答えは、我々には無知があるから、です。真理は、本当は一つのものだけがあります。

ウパニシャッドに金の飾りの例があります。金のネックレスとイヤリングと指輪は、名前も形も違いますが、見方を変えれば、すべてが金、ただそれだけ。基礎が金です。それと同じように、神以外なにもない、ヴェーダーンタの考えでブラフマン以外には何もありません。

このことをバクティの非二元論的な考えで「すべてはラーマクリシュナ」と考えます。それがラーマクリシュナ意識です。キリスト意識では、「すべてはイエス」です。他にも「すべてはお釈迦様」など、どの神様、アヴァターラでもいいです。それがバクティの考えです。

ギャーニの考えでは、「すべてはブラフマン」です。「すべてはブラフマン」という考えと、「すべてはラーマクリシュナ」という考えは矛盾しません。なぜなら、ラーマクリシュナの本性がブラフマンですから。

真理の中に矛盾はありません。悟った人に混乱はありません。

だから、真理を悟った後、イエス様もシュリー・ラーマクリシュナもお釈迦様も混乱が何もありませんでした。バガヴァッド・ギーターの中にはさまざまなヨーガについて書かれていますが、そのどれも矛盾がありません。同じ真理を別の角度から説明しているだけです。

非実在は何も存在がありません。真理、サッチダーナンダを探すために、一時的なものをやめて永遠なものだけをフォーカスする。そのために実在、非実在、ブラフマン、マーヤーと言っています。

参加者：シュリー・ラーマクリシュナは、「すべてを放棄して神だけを求めよ」と言いました。それは人やモノ、つまり外の放棄するのではなく、心で放棄する、つまり中の放棄です。

マハーラージ：バガヴァッド・ギーターでは、たとえ家を出てすべてを放棄しても、心の中で世俗的なことを考え、欲望などがあると、それは「見せかけ」の放棄だと言いました。一番大事なことは心の放棄です。

（３月の勉強）

**📖読み**

**『福音』３６頁上段Ｌ１０～３６頁下段Ｌ１６**

*なぜヴィッギャーニは神に向かって愛の態度をとるのか。答えは『「私」意識』がしつこくつづくから、と言うものです。それはたしかに、サマーディの状態の中では消えます。しかしそれは戻ってきます。普通の人間の場合には、『私』は決して消えるものではありません。アシュワッタの木は、切り倒してもつぎの日には芽が出て来るでしょう（みな笑う）。*

*知識を得たあとでさえも、この『「私」意識』はどことも知れないところから出て来るのです。トラの夢を見る。それから目が覚める。しかし胸はまだドキドキとしているでしょう。われわれのすべての苦しみは、この『私』からきています。雌牛は『ハンバ』と鳴く。それは『私』という意味だ。それだから雌牛はあんなに苦しむのです。それはくび輪につながれて、降っても照っても働かされる。それから、おそらく肉屋に殺されるだろう。その皮からは靴がつくられ、また太鼓もつくられて情け容赦もなく打たれる。ついに、その腸から綿をすくのに使われる弓のためのひもがつくられる。そうするともう、それは『ハンバ！　ハンバ！』とは言わないで、『トゥフー！　トゥフー！』、『あなた、あなた』と言う。そのときにはじめて、雌牛の苦しみは終わるのです。おお主よ、私は召使です。あなたはご主人です。私は子供です。あなたは母でいらっしゃいます。*

*あるときラーマがハヌマーンに、『お前は私をどう見るか』とたずねられました。するとハヌマーンは、『おおラーマ、「私」の感じを持っているあいだは、私はあなたが全体で私は一部である、あなたはご主人であり私は召使である、と見ます。しかし、おおラーマ、真理の知識を持っているときには、あなたは私であり、私はあなたであることを悟ります』と答えました。*

*主人と召使の関係がふさわしいものです。この『私』はどうせ消すわけにはいかないのだから、こやつを神の召使にしておしまいなさい。*

（解説）

**「私」意識、「私の」意識**

「私」意識には、「私(I）」意識と「私の(my)意識」の二つありますが同じことです。

皆さんの「私」「私の」意識にはどのようなものがありますか？

参加者：私の体、私の感覚、私の心

マハーラージ：悟っていない人の、「私」「私の」意識の中心は、魂以外すべての自分の姿、つまり、体、心、記憶などです。

**「私」「私の」意識の中心が魂以外（体、心など）だと、幸せは出ない**

体、心などが「私」「私の」意識の中心だとどのような問題があるか、一つ一つ識別してみましょう。

**体**

苦しみ、悲しみ、心配、恐れは、体意識があるから出ます。例えば、体意識があると、死ぬ恐怖が出ます。

**心**

心と「私」を同一視すると、心は常に動いているので、「私」はいつも動いているように感じます。そうすると幸せは得られません。なぜなら、幸せの一番の基準は、「静か」であることですから。心はたった一秒も静かではありません。寝て夢を見ているときも、心は動いている。誰かが瞑想のために座っているのを、外から見るととても静かに見えますが、その人の心の中は静かではない、ということもあります。

ラーマの叙事詩の物語の中に、鶴の例があります。

ある時、ラーマとラクシュマナとシーターが森に入っていった。歩いて行くと、湖のほとりに一羽の鶴が静かに立っていた。ラーマは「ラクシュマナ、見てください。この鶴はとても偉大な信者のようです。なぜなら、静かにじっとしていますから」と言った。

それを聞いていた魚が湖からジャンプして言った「ラーマ、私はあの鶴と一緒に住んでいるからよく知っているのですが、あの鶴は瞑想をしているのではなく、魚を捕まえるために音を立てずに集中しているのです」。

ふつうの人の心はいつも動いています。心は歩いています、走っています、飛んでいるときもあるでしょう。　そのような心と「私」とを同一視すると、「私」も歩いたり走ったり富んだりしませんか？　ある瞬間はとても喜び、次の瞬間ストレスを感じます。

自分の中心が、体、心になるとそれが問題です。

**記憶**

記憶と「私」を同一視しても問題が出ます。記憶は不確かですから。例えば、自分ではいつも覚えているつもりでも、痴呆症になると自分の名前も分からなくなります。

そのことでおもしろい話があります。

ある老夫婦のもとに、友人が尋ねてきた。友人は旦那さんが奥さんのことを「ダーリン」や「スウィーティー」と呼ぶのを聞いて、たいそうびっくりして言った「あなた方の夫婦生活はずいぶんと長いのに、いつまでも奥さんをそれほど愛しているのですね」と。すると旦那さんは小声で友人に言った「そうではないのです。私は妻の名前を忘れてしまったものですから」。

**自我（エゴ）**

自我はある時は存在し、ある時はありません。

深い眠りにある時、自我はなくなります。自分がどこでどれくらい寝ているか、ということもわからなくなります。もちろん心もなし、自我もなし。「自我がない」という意味は「自我があらわれていない」という意味です。もし「私」の中心が自我だったら、眠っているとき「私」はないことになります。

**結論**

体、心、記憶、自我などと「私」を同一視ている間は、悲しみ、うぬぼれ、嫉妬、執着が、いっぱい出ます。最終的にその状態は不幸な状態です。それが問題です。

**悟った人の「私」「私の」意識は、「私は神様の召使」、「私はブラフマン」**

悟った人の「私」「私の」意識についてトゥリヤーナンダジは、二つだけ正しいものがある、と言っています。

・「私は神様の召使である」「神様の一部分」という考え。バクタの「私」意識です。

・「私はブラフマンです」「私は魂」という考え。ギャーニの「私」意識です。

この二つ以外の「私」「私の」意識は、すべて間違いです。

タクールが述べているのは、ほとんどバクタの「私」「私の」意識についてです。なぜなら、ギャーニの「私はブラフマン」「私は魂」という実践は難しいですから。

しかしどちらの実践を選んでも構いません。シュリー・ラーマクリシュナもイエスも、バクタの道もギャーニの道もどちらも経験されました。例えば、イエスは「私は神の息子」という態度のときもあれば、「神と私は同じ」という態度のときもありましたね。それでも、ギャーニの「私は魂」という実践は難しいので、バクタの「私は神様の召使」、「私は神様の一部」と考えたほうがいいでしょう。

**サマーディから戻った後の「私」「私の」意識は、「私はマザーの息子」**

サマーディから戻った後に「私はブラフマン」「私は魂」意識であると、人と話をすることができません。人間関係を結ぶのも、仕事をすることも困難です。

シュリー・ラーマクリシュナはサマーディに入っているときは、話をすることはできませんでしたね。サマーディから戻ってすぐ後も、少し話をするのが難しかった。その後、だんだんと普段の状態に戻ってちょっと体意識が戻ると、話すことができました。そのときは、「マザー」と「マザーの息子」という関係でした。それはバクタの意識です。

サマーディのときは「私」意識、「私の」意識はなくなっています。だから皆さんを教え導くためには、サマーディから引き戻して体に戻らないと、教えることや仕事ができません。例えば、スワーミージーには僧院を作るなどの仕事がたくさんありました。それをするために、少ーしの部分の普通の状態を残しました。その時の「私」意識は、「私は神様の意識」「私は神様の道具」です。バクタの「私」「私の」意識です。

ヴィッギャーニの「私」「私の」意識と、バクタの「私」「私の」意識は似ています。

**悟っていない人も、「私は神様の息子、娘」、「神様の道具」と考えるべき**

**（サマーディから戻った人と同じ態度をとるのがいい）**

悟った人はサマーディに入っているときは「私」「私の」意識、「体」意識は消え、サマーディから戻ると再び「私」「私の」意識が戻ります。

しかし、悟っていない人は「私」「私の」意識、体意識は片時もなくなりません。ずっと続いています。

では悟っていない人は、どのような態度をとればいいでしょうか？

悟った人がサマーディから戻った時に、「私は神様の息子、娘」、「神様の道具」という考えが出ます。悟っていない人も悟った人と同じ態度をとるのがいい、というのがシュリー・ラーマクリシュナの助言です。

**シュリー・ラーマクリシュナは、人びとを導くためにサマーディから強引に体意識に引き戻した。**

雌牛が、「おお主よ、私は召使です。あなたは主人です。私は子供です。あなたは母です」と言ったように、シュリー・ラーマクリシュナはサマーディから戻るといつも、そのように考えていました。「私はマザー・カーリーの息子です」という態度でした。いつも「マザー・カーリー」「マザー・カーリー」と、サマーディから戻って言っていましたね。サマーディに入っているときは神様と一つになるので何の意識も出ません。サマーディから戻ると体意識が少しだけ出ました。なぜなら体意識がないと生きることができないからです。そして生きていないと、神の化身としてあらわれた目的が果たせません。

シュリー・ラーマクリシュナはマザーに「どうか私にブラフマ・ギャーナを与えないで下さい」と言いました。求道者、サドゥ、聖者ならみんなブラフマ・ギャーナが欲しい。しかしシュリー・ラーマクリシュナは「いらない」と言いました。なぜなら、ブラフマ・ギャーナ、サマーディに入ると、皆さんに教えることができないからです。そのためにシュリー・ラーマクリシュナは皆さんへの慈悲からブラフマ・ギャーナを与えないでください、とマザーにお願いしたのです。どれほど一般的な求道者とシュリー・ラーマクリシュナが違うか分かりましたか。

シュリー・ラーマクリシュナの普通の状態はサマーディの状態なので、『福音』に出てくるように、シュリー・ラーマクリシュナは度々サマーディに入りました。その時に、神様に小さな小さな願い、例えば「水を飲みたい」「少し食べたい」と祈ることで、強引に心を体意識に引き戻したのです。その小さい願いがないとまた、サマーディに入ってしまいます、心を引き戻すことができない。本当はのどが渇いているから願ったのではありません。

**神様に対する三つの態度**

そしてサマーディから戻ると、「私はあなたの息子、召使い」という考えでした。そのことについて、本文ではハヌマーンの例がでました。『福音』の別の場所ではもっと詳しくハヌマーンの態度が書いてあります。　👉（『福音』888頁下段参照）

ハヌマーンはラーマに対して三つの態度を取りました。

**・****デホ・ブッディ（体意識）**

「ラーマ、あなたは主人であって、私は召使です」

デホが体という意味で、ブッディは意識です。

デホ・ブッディ（体意識）がある間は、あなたと私は、別の体です。

二元論です。

**・ジーヴァ・ブッディ（魂意識が出ているが、体意識も続いている）**

「ラーマ、あなたは全体で、私は一部分です」

デホ・ブッディより少し上の状態はジーヴァ・ブッディです。

ジーヴァ・ブッディとは、魂意識が出ても体意識もある状態です。両方続いています。聖典をたくさん勉強して、実践して、魂意識を持っています。しかし、体意識もなくならず続いている。体を持っている魂をジーヴァと言います。

ブラフマンとジーヴァ **⇔** パラマートマン（至高の魂）とジーヴァートマン（肉体に宿っている魂）です。

ジーヴァ・ブッディのときは、限定された非二元論です。

「私はあなたの一部分」、「私はブラフマンの一部分」、「私は神様の一部分」という考えです。

波と海をイメージしてください。波は海の一部分です。

木と木の枝をイメージしてください。枝が木の一部分で、木がないと枝はない。

それがジーヴァ・ブッディです。

**・アートマ・ブッディ（魂意識）**

「ラーマ、あなたは私であり、私はあなたです」

そのもっと上の状態は、アートマ・ブッディです。その時は魂意識だけです。

その意識が出ると、「神様、あなたと私は一緒です」「私の本性も純粋な意識で、あなたの本性も純粋な意識です」。それで一つになります。

非二元論です。

例えば、あるポットのきれいな水を別のポットのきれいな水に入れると、一つになります。その状態です。

すべての川には名前と形があります。しかし、川が海に入ると、すべての川の自分のアイデンティティはなくなります。形も名前もなくなり、川は海と一つになります。そのような感じです。しかし、体意識が戻ると、再び「あなたは持ち主、私は召使です」という考えになります。

**📖読み**

**『福音』３６頁下段Ｌ１７～３６頁下段Ｌ２２**

*『私が』と『私の』―　これらが無知を作っているのです。**『私の家』『私の富』『私の学問』『私の所有物』―　人にこのようなことを言わせる態度は、無知からきます。反対に、知識から生まれる態度は、『おお、神よ、あなたがご主人であり、これらすべてのものはあなたのものです。家も、家族も、子供たちも、召使も、友だちもあなたのものです』というものです。*

（解説）

**すべては神のもの**

すべては神様です。そして、「私が」と「私の」という考えが無知です。

本当は、すべては神様のものですが、我々の一般的な見方で「私が作った家、私の娘、私の富、私の体」と考えます。口先だけで「神様、すべてはあなたのものです」と言っても、心では「私のもの」だと考えています。

例えば、ある家住者が「私は全然お金を所有していない」と言っていましたが、実際は、その人の奥さんの名前ですべて銀行に預けていました。（笑い）

奥さんや子供の名前で銀行にお金を預けることは、放棄していることになるでしょうか？その人が「お金を持っていない」というのは口先だけのことではありませんか？

それと同じように、口先だけで「すべてはあなたのものです」と言いながら、心で「全部私のものです」と考えていると、進むことはできません。

「すべては神のもの」ということは、悟らないと分かりません。しかし聖典をいっぱい勉強し識別すると、そのことが頭でちょっと理解できます。それが最初の段階です。安定して「すべては神のもの」と理解する状態ではないですが、ちょっとは理解できます。少なくともそこまでの理解は大事です。そうすると、「神様、すべてあなたのものです」という祈りが、心から自然に出る可能性があるからです。

だから悟っていなくても「何も私のものではない、神様のものです」と識別しましょう。

そして識別をするときには、一つ一つについて考えてください。

我々は、「私の家、私の家族、私の体」と思っていますが、もし本当に私のものだったら、全て自分がコントロールできるはずです。自分の所有物だったら、自分が望めばいつでもどこにでも持って行けるはずです。それが自分のもの、自分で作ったものです。

**一つ一つ細かく深く識別すると神以外何もないことが分かる**

**（料理についての識別）**

みなさんは、「私は料理している」「私がその料理を作った」と考えます。しかし実際は、

・料理を作るためのものを私は何も作っていない。（野菜、スパイス、電気、ガスなど）

・料理をするための力は、自分の力ではない。栄養があるものを飲食することで力が出る。

・体を使って料理するが、体は自分で作っていない。体は父母からもらったもの。

・料理を作る才能も、自分で作っておらず最初からある。才能は実践を重ねてさらに上達する可能性もあるが。

このように、自分が作ってないものを「私のもの」と言っています。

**（体についての識別）**

・「私の体」は自分で作らず、父母がつくった。

・父母にはさらに父母がいて、その父母にもさらに父母がいる。

・そのようにさかのぼると、プラクリティにたどり着く。（この宇宙、宇宙のすべての生きものは、プラクリティから出ている）

・プラクリティは５つの要素（空、風、火、水、土）と３つのグナ（サットワ、ラジャス、タマス）としてあらわれている。

・プラクリティは、神様から出ている。

神⇒プラクリティ⇒宇宙⇒宇宙の中にすべてのものと生きものがある。

結論は、すべては神、神以外何もない、です。

**（生きていることについての識別）**

・我々は今、生きている。

・もし、太陽がなかったら、風、水、土地がなかったら、どうなるか？

・この瞬間にもし酸素がなくなると、みんな無意識になる。

**（人間関係について識別）**

・今ある人間関係は今生だけ。

・死ぬとすべての人間関係はなくなる。

そう考えると、人間関係も自分のものではありません。

このように識別すればわかります、我々は、本当に何も作ってないということが。我々が生きることを維持できているのは、たくさんのものや人のおかげです。それなのに「私」「私の」と考えます。先ほども言ったように、我々はプラクリティから出ています。空、風、火、水、土という５つの要素が、いろいろ組み合わさって、いろいろ混ぜ合わさって、この体もできています。そしてプラクリティは神様からあらわれた。そうすると、すべてが神様で神様以外何もない。

**📖読み**

**『福音』３６頁下段Ｌ２３～３７頁上段Ｌ８**

*人は絶えず死をおぼえていなければいけません。何一つ死ぬときに持って行くことはできない。われわれは、ちょうど仕事のために田舎からカルカッタにきている人びとのように、ある務めを果たすためにこの世に生まれて来るのです。金持ちの人の庭園にもし訪問者があれば、管理人はその人に向かって『これが私たちの庭です』とか、『これが私たちの池です』とか言うでしょう。しかし、もしこの管理人が何か間違ったことをして解雇されたなら、彼はマンゴーの木の箱一つ運び出すことはできません。門番に頼んでこっそりと送り出すのです（笑い）。*

（解説）

**「わたしのもの」は何もない**

自分の所有物はどこにでも運べるはずなのに、亡くなった後、「私のもの」だと思っているものを天国へ運べますか？　それに関して、あるけちん坊の話があります。

**（「私のもの」は何もないと気づいたけちん坊の例）**

あるところにとてもけちん坊な人がいた。その人は大金持ちだったがお金を貯めることが好きで家族のためにすらあまりお金を使わなかった。家族が怒っても「それは私のお金だ、お金は私の命だ」と言って取り合わなかった。

そのけちん坊には、仕立て屋の友達がいたのだが、その友達は病気で亡くなった。その後、けちん坊が大病を患い入院した際に、亡き仕立て屋の友達の息子が、けちん坊のために一計を案じた。彼はけちん坊の病室に来て「おじさん、私の父が夢にあらわれて、『私は今、天国にいるのだが天使の服が少しほつれているので直したい。しかし天国に針も糸も持ってきていないので、誰かに持ってきてもらえないだろうか？』と言うのです。針と糸はとても小さなものです。もしよかったら天国に持って行ってもらえませんか？」と尋ねた。けちん坊は「それくらいなら大丈夫、持って行くよ」と言った。そう言ってからけちん坊は考えた。

「私が死んだら体も服もなくなる。どうやって針と糸を持って行けばいいのだろう？」

けちん坊はさらに考えた。

「あれ？　私は針と糸さえ天国に持っていけない。そうしたら私のお金を運ぶことなんて絶対に無理だ。お金が本当に私のものならば、どこにでも運べるはずだが、死んだらすべてを置いて行かなければならないじゃないか」

そう理解して、けちん坊は神様に言った。

「神様、もし私が元気になったら、私のお金はみんなのお世話のために使います。一体なんのために私はお金をため込んでいたのでしょう。富も親戚もすべて置いて行かなければならないというのに。神様、すべては私のものではないということが分かりました！」

**📖読み**

**『福音』３７頁上段Ｌ９～３７頁上段Ｌ１７**

*神は、二つの場合にお笑いになる。彼は、医者が病人の母親に向かって『心配いりません、お母さん、私が必ずこの子を治してあげます』と言うとき、お笑いになる。彼は『私がこの子の命を取り上げようとしているのに、この男はそれを救ってやるなどといっている』と思って、お笑いになるのです。神はまた、二人の兄弟がひもを張って『こちら側が私の土地でそちら側がお前の土地だ』などと言い合っているときにお笑いになる。彼は『全宇宙は私のものである。それなのに彼らは、自分がこの部分を持つとかあの部分を持つとか言っている』と思ってお笑いになるのです。*

（解説）

ベンガル語で面白い言葉があります。

⁑もしクリシュナ神がある人を守ると決めたら、誰もその人を殺すことはできない⁑

⁑もしクリシュナ神がある人を殺すと決めたら、誰もその人を守ることができない⁑

賢いお医者さんは、「私は治療しますが、神様が治します」と言います。私がニューデリーの病院に行った時、「私は治療をしますが、治すのは神様です」と書いてあるのを見たことがあります。

普通の「私」「私の」意識の問題は、うぬぼれが出ることです。

すべては神様です。自分の体も家族も富も才能も、自分のものではありません。仕事も自分の仕事ではない、神様の仕事です。

**「私」「私の」意識を、「神様とつながった私」にすると幸せが出る**

シュリー・ラーマクリシュナが言うように、「私」意識はなくならないので、「神様とつながっている私」を実践すべきです。

神様と自分がつながっている状態です。

「私」「私の」意識を、神様とつながった状態で考えるのです。

そうすると、幸せが出ます。無知がなくなります。

そうしないと、苦しみ、悲しみ、無知、幻惑、束縛はなくなりません。

神からプラクリティが出た ⇒ プラクリティから宇宙が出た ⇒ 私は宇宙の中のひとつ

そう考えると、すべては神の問題です。

そのことを理解すると、「神様、あなたのものです」という祈りが心から出ます。

少なくとも頭で、理解してください。

「本当はすべて神のものです。私のものは何もない」ということを。

**本当の「私」は＝「魂」「神」**

本当の「私」とは何でしょうか？

バクタの考えで、「『私』は神様の息子」です。

ギャーニが識別すると「『私』はブラフマン」となります。

本当は「私」意識はなくなりません。消えない。ずっと続きます。

例えば子供のときも、若いときも、だんだん年をとっても「私」意識は変化せず同じ「私」意識が続いています。

体は本当の「私」でしょうか？　体は変化します。しかし「私」意識は変化しません。だから体は「私」ではありません。もし体が「私」なら、「私」意識も変化しなければならないからです。

心は「私」でしょうか？　心は変化します。子供のときの心の状態、若いときの心の考え、今の心では、考えは変わっています。例えば、子供のときはキャンディが大好きだったけれど、若いときはタバコが好きになるかもしれない。年を取るとまた別のものが好きになる。また、ある時ある人をとても愛していても、後でその人をとても嫌いになる。自分の心、考えが変化しました。ですが「私」意識は変化していません。だから心は「私」ではない。

そのように識別を続けていくと、最終的な結論は、魂だけは「私」です。

魂は変化しませんから。魂以外は体、心、感覚、記憶、自我、全部変化します。例えば、深い睡眠のときは、自我もなくなっています。しかし、その時も「私」意識、魂は続いています。深い睡眠のときも魂は続いています。深い睡眠のときには、心意識はない、体意識もない、感覚意識もない、記憶意識もない、自我意識もありません。

ではなぜ、目覚めた後に、寝る前の「私」と起きた後の「私」が同じだと認識できるのですか？

その答えは、魂が続いているからです。

その魂が本当の「私」です。

バクタの言う「神」と、ギャーニの言う「純粋な魂」は同じです。

「私は神様の召使」と言うときの神様と、ギャーニの言う魂、ブラフマンは同じす。

すべて、サッチダーナンダです。

同じことの見方が違うだけです。

道だけが違います。

最終的な真理は同じです。悟りそのものは同じです。

（第６１回『福音』勉強会）以上